2010 年 9 月 22 日放送

漢方医人列伝 「尾台　榕堂」

千葉中央メディカルセンター　和漢診療科部長

社団法人日本東洋医学会　会長　　寺澤　捷年

今回は江戸・幕末の名医、尾台榕堂（おたいようどう）について取り上げたいと思います。

榕堂は寛政１１（1799）年の生まれで、明治３（1870）年、７２歳で亡くなっています。

今日、私たちはその学問的成果の恩恵に浴していますが、とりわけ、『類聚方広義』安政３（1856）年刊、『方伎雑誌』明治４（1871）年刊、は非常に貴重な著作です。

榕堂先生は越後の国、魚沼郡、中条村（現在の新潟県十日町市）の医師・小杉三貞の第４子として誕生しました。この小杉家の学風が古医方であったことが、まず名医誕生の出発点でした。『方伎雑誌』には榕堂が１３歳の折りに高熱患者を往診し、頭痛・発熱・全身の疼痛、脈は浮・数・実であることから、麻黄湯を投与し、その祖父である小杉紫峯から「でかしたり」と褒められた逸話が記されています。これによって、小杉家の学風が古医方を主軸にしていたことが窺えますし、また榕堂が１３歳という年齢で『傷寒論』をほぼ修得していたことが分かります。

一方、儒学については地元の円通寺の寺塾において惟寛（いかん）禅師の下でその基礎を学びました。この惟寛禅師が榕堂のその後の大成にとって最も重要な人物であります。

詳細は『漢方の臨床』誌に「尾台榕堂大成の序章」として（2010 年８月号）記しておきましたのでご参照下さい。

榕堂は１６歳（1814 年）の時、江戸に出て学問を深めようと決断しました。その際に榕堂を江戸に連れてきてくれたのが惟寛禅師でした。禅師は江戸・駒込の吉祥寺で修行をした曹洞宗の高僧ですが、その修業時代に当時の江戸の儒学者や文人と交友があり、その人脈によって尾台浅嶽を紹介してくれたものと私は考えています。

この漢方の師匠となった尾台浅嶽（1771-1834）は吉益東洞（1702-1773）の弟子である岑少翁（1732-1818）の弟子でありますので、榕堂は古医方の本流にたどり着けたのです。しかも私の歴史的考証によれば、榕堂は最晩年の岑少翁に直接指導を受け、古医方の神髄に接することが出来たのです。

師匠である尾台浅嶽について古医方を学ぶ傍ら、儒学を亀田綾瀬（かめだりょうらい）の家塾で学びました。ここで学んだ儒学は当時、幕府の官学であった朱子学に捕らわれず伊藤仁斎や荻生徂徠の唱えた古義学や古文辞学をも含めた自由な儒学であったことを指摘しておきたいと思います。すなわち、朱子学の言う「理」の論理では無限の大自然は説明できない。むしろ、自然のありのままを素直に認めるという考えです。これは吉益東洞の思想の根本を形成する思想ですから、古医方の神髄を理解するには、古義学、古文辞学の思想を学ぶことが不可欠なのです。当時、「寛政異学の禁」によって「異学」とされた亀田綾瀬の家塾に学べたことは幸運以外の何物でもありません。

このような努力を約１０年間行った榕堂は、病弱な兄を助けるために故郷の中条村に帰郷しました。中条村は信濃川に沿った山村ですが豪雪地であります。そこでの非常に貧しい生活の中で、自ら鍬や鋤を振るい農作業にも従事したと言われています。

この様にして約１０年が経過し榕堂は３６歳になりましたが、この時、天保５（1834）年に江戸に大火が起こり、師匠・尾台浅嶽の家も罹災し浅嶽が死亡するという事件が起こったのです。浅嶽・令夫人のたっての希望で尾台家の再興のために、尾台家の夫婦養子となり家業を継ぐと共に、残された遺児の養育に当たったのです。儒教の教えが身についていたからこそ出来たことと考えますが、一方、古医方の継承と発展にとって尾台家の再興は榕堂にとって天命と捕らえられたのではないでしょうか。

天保１０（1839）年、家塾を「尚古堂」と名付け後進の指導にあたりましたが、その生涯に 300 人以上の弟子を育てたのです。その研究姿勢は古医方の本質を継承・発展させるもので、嘉永４（1851）年には治療経験を集大成した『橘黄医談』を刊行し、嘉永６（1853）年には吉益東洞の『薬徴』の複数の伝写本を参照し、校訂した『重校薬徴』を刊行。また同じ年に『類聚方広義』を著しています（出版は 1856 年）。榕堂 55 歳の偉業です。

その後も精力的に著作に取り組み、安政２（1855）には『療難百則』、文久２（1862）年には『医余』を、元治元（1864）年には『霍乱治略』、慶応元（1865）年には『学思斎存稿』、慶応３（1867）年には『閑窓筆録』、明治２（1869）年には『井観医言』、『方伎雑誌』を著しています。その臨床能力とこれを筆録する力、読書量は共に常人には出来ない業績です

が、黒船来航（1853 年)、オランダ医学の台頭を目の当たりにして止むに止まれぬ気持ちが榕堂を突き動かしたと私は考えています。江戸幕府は正に危機的状況にあったわけですが、医学の面でも弟子の多くが西洋医学（オランダ医学）に転向したのです。その嘆きは『方伎雑誌』に切々と述べられています。

「事実をありのままに見る」という榕堂の理念は「科学的に物事を考える」という西洋医学のパラダイムに対抗するものではなく、むしろその受容を容易にしたことを指摘したいと考えます。今日でも古医方を主軸とする日本漢方に対して「理論がない」との批判が厳然として提示され、ある者は中医学に理論的根拠を求めています。しかし、私は『黄帝内経』を鼻祖とする思弁的な理論を如何ほど展開しても、それは自家撞着の世界からは脱却出来ないのです。

再度、申し上げたいことは、吉益東洞が主張したように、有限の人間存在は宇宙の無限的存在を思議できないのです。これは決して古医方の敗北主義ではありません。もしも科学が漢方の持つ知恵の、その一部でも解明出来るならば、それも活用すれば良いのです。しかし私たちは科学の限界もはっきりと認識する必要があります。それは科学という哲学が普遍性、客観性、論理性を担保するという前提として成り立ち、しかもその研究手法として「要素還元論」をテーゼとしていることです。そこでは「心」の問題は棚上げにされており、しかも一見すると無関係な「コトバ」にもならない心身の複合的な不具合を認識し説明する思考を持たないことです。

榕堂が晩年に老体に鞭打ち、古医方の臨床的実力、理念の神髄を記したのは、このパラダイムの相違を明らかにしたかったのだと私は考えます。

榕堂の主張の正しさは、２１世紀の医療の現状を考えるとき決してその光を失っていません。むしろ輝きを増していると確信しています。わたしたちが目指すのは東西の優劣を競う理論闘争ではありません。目前の病める人々に如何に最善の効果を、安全に、確実に提供するかにあります。そこには東西の別はありません。有限な我々が広大無辺の宇宙の摂理に如何に向き会うかです。

そこに医道の本質があると私は確信し、榕堂翁の恩恵を蒙りつつ、日々、臨床に励んでおります。今に生きる榕堂翁、その様な存在になることが私の夢であり、生き甲斐です。

参考文献　　寺澤捷年：完訳・『方伎雑誌』、たにぐち書店、2008